蘇芳集

十一月

青山　丈

天気雨などに降られて神無月
昨日今日見て綿虫になつてゐる
セーターで居る日は本を読んでゐる
いつか買ふポインセチアが並びだす
濡れた手で鮟鱇鍋が点火され
向き向きに日の暮れてゐる浮寝鳥
耳掻きが十一月の耳を掻く

おもむろに

前田　陶代子

ことごとく赤き信号原爆忌
おもむろに礼を交せり花木槿
石段の石に木洩日踏んで秋
秋蝉や四角く乾く外流し
熊笹の丈のざわめき終戦忌
最寄駅たしかむ秋のさるすべり
書き出しの文字のかするる秋の蝉

葛の花

松原　ふみ子

晩涼の肩抽んでて奥穂高
けさ秋の大桟橋に船を見ず
糸瓜忌や谷中寺町風ばかり
奥津城へきちんと並ぶ秋の雲
葛の花辿りて道のなほ尽きず
穂絮飛ぶ空の果まで晴れわたり
湧水のこもり音に来て秋の蝶

露草

峰岸よし子

露草の秘色の雫こぼしけり
かまつかやこの頃咀嚼ねんごろに
人の眼を引きずりて消ゆ秋の蛇
聴きつづく民話ねむたし種瓢
稲妻や玻璃をむんずと子の十指
おとうとの老いて佳き顔今年酒
ばつたんこ日暮の音となりにけり

一遍忌

宮尾直美

ピカソの絵青よし夏も了りけり
道沿ひの名もなき草や一遍忌
白桃を啜る電話の鳴つてゐし
白桃や生後十日の赤ン坊
病歴を記すなりはひちちろの夜
無花果や父の少年期を知らず
コスモスの百万本の風の色

朝の鵙

八木下末黒

バイク転倒夏草が顔の上
養生の窓越に見る秋の薔薇
眸忌や杖を恃みに露を踏む
眸忌の洗濯日和つかひきる
秋風の中の虹いろ貝釦
海風に棚引く秋の蚊遣かな
養生の試し歩きや朝の鵙

白花曼珠沙華

吉田幸敏

緑道の伐らるるこの木鵙鳴けり
無言館裏や白花曼珠沙華
筆先の呉須とぎれなき夜半の秋
百年は生者に永し鰯雲
潜り戸をいつもの路地へ出て子規忌
サーカスのもう来ぬ広場穂草抜く
ためらはず応への鳩を吹きにけり

ふたいろ

小川美知子

木もれ日の上に木もれ日九月来る
擦れ違ふ人を秋日と思ひけり
先頭が草の蔓引く秋の風
人見つつ人待つ駅の秋の暮
何かやり掛けては月を見てをりぬ
露の夜の新聞ゆるく畳みけり
吊革のふたいろ後の彼岸来る

飼はれたる鳥

木内憲子

九月しづかに飼はれたる鳥が啼き
小さき魚小さく育ちて九月かな
吹かれつつ月あらたまる女郎花
草々と吹かれて二百十日かな
かんたんに咲くおしろいを通るたび
秋扇や反故になすこととしたきこと
ゆふがたをひとりになれば秋のこゑ

月の秋

清水裕子

崖の土のほろりと秋闌けり
荒草や露にまみれて凭れ合ひ
桐一葉踏めば音たつ山日和
往き還り稲架掛けをみる没日濃し
身の丈に余す吾が影月の秋
浮御堂みえて月夜の人の影
また一人逝く秋の川音もなく

草の花

下平直子

洗面の石鹸にほふ朝の虫
摘みためて雨の匂ひの草の花
隠沼の藍ふかぶかと森は秋
無花果をさと捥ぎくれし別れ際
鯖雲や目を病みてより世に疎く
投稿の句を読み直す月明り
あたたかき茶の香りたつ夜長かな

ひぐらしの　　冨田正吉

ひぐらしのこゑはあの木かあの子かな
八月は父の忌そして十五日
母の忌が近くて梨が甘くなる
細目して秋風の尾を捉へけり
何事もなかつたやうに桃を剝く
母の忌はその日のやうな秋暑かな
曼珠沙華歩けば歩くほど殖ゆる

中程に　　別府優

盆過ぎの顔拭くたびの耳の裏
昨日引く鉢の穂草を今日も引く
妹のいつもうしろに蓼の花
中程に厄日のありて休養す
須弥壇へ後の彼岸の膝をつく
退勤の顔ぶれ揃ふ田刈かな
あやふやなワンタン掬ふ夜長かな

自句自解

母の忌はその日のやうな秋暑かな　　冨田　正吉

母は昭和六十一年九月三日に逝った。父は『江戸川』で〈沼澄みて吾れに相寄る影もなし〉、私も『泣虫山』で〈水澄むや母といふ語は短きよ〉と詠んだ。岡本眸先生には『矢文』で〈括り萩来馴れし家を通夜に訪ひ〉と詠んで戴き有難かった。その日の暑さは忘れがたいものがあった。晩年の母は糖尿病と腎臓病で臥すことが多く父が世話していた。今も残念に思っているのは早くに大病院に診せなかったことである。以来母を必ず詠むことにしている。

緑道の伐らるるこの木鵙鳴けり　　吉田　幸敏

一口に横浜と言っても、どこからでも港が見える訳ではない。住んでいる北部は、開発が遅れたせいか自然が多く残っている。この辺りは、市が主となって開発した地域なので、環境に配慮が行き届いていて緑道も設けられている。下草を刈るなど、手入れも常時なされている。今年の整備では、大きくなり過ぎた木を伐るらしい。選ばれた木には目印の赤いテープが巻きつけられた。鵙が来て鳴き始めた。工事を告げる看板が立ち出している昨今である。